

## 「精神医療ミュージアム移動展示プロジェクト—私宅監置と日本の精神医療史（2014年11月12～14日、ソウル）」 短報

橋 本 明

いつの頃からか、精神医療史の移動ミュージアムをやったらどうか、と思うようになった。「ハコモノ」としての博物館は、もはやアナクロニズムかもしれない。ウェブ上で展開させるバーチャルな博物館、なんていうのも当たり前すぎる。とにかく人と同じことはやりたくない。

そんな気持ちで「歴史理解にもとづく精神保健福祉教育プログラムの開発」という、地味っぽいけれども（地味じゃないと研究費もらえないし）、新機軸を盛り込んだつもりで科研費研究（挑戦的萌芽研究）を2014年度からはじめた。そのひとつに「移動ミュージアム」を掲げている。

そこで、2014年の6月くらいから、知り合いの精神保健・医療・福祉関係者の何人かに問うてみた。一般の人でも関係者・専門家相手でも、どちらでもいいのだが、これらの人たちに向けた「精神医療史の展示会（+講演会）」を実施したいのだが、どうだろうか。すると、「それはいいですね」とか、「いろんなことを考えているんですね」とか、とりあえず、困惑気味だが挨拶程度の反応は返ってくる。

だが、それを実際に引き受けてくれ、協力してくれるかと迫れば、「しかし、精神医療の歴史を表に出すことは、偏見をむしろ助長する」とか、「私宅監置？ 今の精神医療と混同されるかもしれない」とか、「うーん、考えときますが」とか、なんとか、かんとかで、結局、誰もいい返事をしないのである。要するに、観客としてならいいが、面倒なことには関わりたくない、蒸し返したくない過去には蓋をすとか、そういうことなのか。それとも私の「本気度」が伝わらないのか。

別に大きな展示会をするつもりではなく、歴史を通じて精神医療についてみんな考える・語る、という場を設定したいだけなのに。

これが、精神医療史に対する、わが国の一般の人たち（私が伺いを立てているのは、むしろ「専門家」だが）の反応である。というようなことを、大学院人間発達学研究所博士後期課程の「精神医療史研究特講」という1人対1人の授業で、韓国人院生の金仙玉さんに話していたら、「韓国でなら、できるかも」ということになった。彼女がいろいろと尽力してくれて、最初はなかなか話も進まなかったものの、しぶとい交渉力が功を奏したようで、気がついたらソウルで展示会の打ち合わせをすることになった。それが2014年8月上旬のこと。急遽ソウルへ（実に四半世紀ぶりで、ソウルの駅前の変容ぶりにびっくり）。ソウル市内にある人権団体のビルの一室に（金さんを含めた）障害者団体の関係者が集まった。私が開催の趣旨を話し、参加者からの質疑を経て、だいたい開催期間と開催場所を決めた。さらに、その後、日本に帰ってきてからのメールのやりとりの結果、2014年11月12～14日に、「人権財団サラム・人権中心サラム」（ソウル市麻浦区ソンミ山路10道26）のビルで展示をすることになった。このビルの1階は、ガレージを改装したギャラリーになっているのである。会場は地下鉄6号線の望遠（망원/Mangwon）駅から徒歩で約10分。さらに、同ビルの会議室で11月14日午後1時から3時まで、講演・討論会「日本の精神医療の歴史と現状」を開催することも決まった。このあたりの交渉、そして、以下の展開においても、韓国

語にかかわる通訳・翻訳のかなり部分は、金さんに負うところが大きい。

さて、そのあとの開催準備は結構大変だった。まず、ギャラリーに展示する10枚のポスターを作成することになった。「私宅監置と日本の精神医療史」の概要を、写真や図を入れた、わかりやすい、見栄えもよい、10枚のストーリー仕立てで表現しなければならない。ポスターの内容やデザインは自分でできるが、A1サイズのポスターの製作は業者に外注。ポスターは運搬の便宜を考えて、布製のものにした。ポスターに加えて、展示会で配るA4サイズの24頁からなるパンフレットも作成することにした。ポスターだけでは情報量が少ないので、ポスターの内容を補うやや詳しい説明が必要だと思ったのである。問題は言語である。もちろん、ポスターとパンフレットの日本語テキストは私が作るわけだが、韓国語への翻訳がある。私の意図が正しく表現されているかどうか、韓国語ができない私には確認できない。したがって、韓国語を母語とする、あるいは大学で韓国語を教えている複数の訳者の目を通して、日本語⇔韓国語の翻訳作業をくりかえし、チェックしなければならなかった。

展示会場の入り口およびパンフレットの冒頭に、以下のような「ごあいさつ」を掲げることにした。「公式」の開催趣旨が簡潔に表現されているので、参考までに紹介したい（実際には韓国語に訳されている）。

一般市民の精神障害への関心は概して低く、メディアを通じて精神障害への誤解や偏見が助長されかねません。私たちはこうした現状を少しでも打開するために、精神医療や精神保健福祉に関する歴史を素材にした教育的プログラムの開発をめざしています。その重要な柱と位置づけているのが、「移動型ミュージアム」です。日本国内・国外の各地を移動して、小規模ながらも精神医療史の展示を順次行うことを考えています。

今回とりあげているのは「私宅監置と日本の

精神医療史」という展示です。確かにこれは、「日本の近代」という限られた場所と時間に起きた現象を扱うものです。しかし、精神障害と向き合う国家、社会、家族や個人の対応には、空間と時間を超えたかなり普遍的な問題が存在しているのではないのでしょうか。

「精神医療ミュージアム移動展示プロジェクト」の記念すべき第1回の展示を、隣国のソウルで開催することをとても嬉しく思います。この展示をつうじて、精神医療や精神障害者福祉に関わる日韓の国境を越えた有意義な議論と対話が行われることを期待しています。

なお、展示会で配ったパンフレット（韓国語および日本語の2種類のバージョン）は、research map 上の筆者のサイト (<http://researchmap.jp/read0051451>) で「資料公開」を開き、タイトル「정신의료 이동 박물관 전시 프로젝트 사택감치와 일본의 정신의료사／精神医療ミュージアム移動展示プロジェクト 私宅監置と日本の精神医療史」の「詳細を表示」をクリックすると、pdf ファイルとしてダウンロードできるようになっている。

さて、いよいよ展示会が近づいた2014年11月10日夜、準備のために中部国際空港からソウルに向かった。200部作ったパンフレットの重みのせいか、ソウル行きの飛行機ではスーツケースが25kgになった。無料の重量範囲を越え、追加料金を払う羽目に。

翌11日は準備。名古屋からソウルに運んだ布ポスターと手作りのパンフレットを、今度は宿泊先の南大門近くのホテルから展示会場に運ぶ。まず、展示会場近くの地下鉄6号線の望遠駅で関係者と待ち合わせ。上記の金さんを含めて、愛知県立大学関係者（院生・元院生）など数人も助っ人として来てくれることになったのである（彼女らの主たる目的はソウル観光のようではあったが）。会場での仕事は、ポスターを壁に貼るくらい。会場まで足を運んでくれた人のための記帳台とノートなどもセッティングした。助っ人のおかげで作



写真1 展示会場の建物の1階部分、奥の暗く見えているところが展示ギャラリー

業はあっという間に終わる（写真1・写真2）。

会場でコーヒーを飲んでだべっているうちに夕刻になり、ソウルでの会場手配で大いにお世話になっている韓国人のCさんとみんなで夕飯を食べに行くことになった。地下鉄を乗り継いで、安国駅へ。仁寺洞通りの周辺をぶらつく。みやげ物店、骨董品店、ギャラリーが多い。掘り出し物がありそうな、おもしろい街である。どこの路地を歩いたのか、まったくわからないが、案内されるままにある韓国料理の店へ。みんな、2万5千ウォンのコースを選ぶ。柚子のマッコリを飲む。

翌日の11月12日から14日までが展示会の本番である。どんな雰囲気で行っていたのかを振り返ってみたい。

ソウル市内、南大門近くのホテルから同市の麻浦区の会場まで「通勤」した。ホテルからソウル駅まで歩き、地下鉄の4号線（淑大入口方面）に乗る。さらに、三角地駅で6号線（孝昌公園前方面）に乗り換え、望遠駅で降り、1番出口から出て、住宅街を通り抜けて展示会場へ。「通勤」所要時間は、全部で40分くらいか。会場の係りの人が午前10時にやって来るので、早めに行くとは外で待つことになる。11月13日は韓国の大学入試センター試験（毎年、この時期は一気に冷え込むのだ、とは地元の人のお話）だったようだが、この日は外で待っていて、とても寒かった。

会期中にそんなに多くの人が訪れたわけではな



写真2 ギャラリーの壁に貼られたポスターの一部

いが、そのぶん来訪者とじっくり意見交換ができたのは幸いだった。日本の精神医療史そのものに興味をもってくれる人もいた。が、日本との比較において、韓国の精神医療や障害者福祉の歴史や現状が語られる場合が多かった。それは十分予測されたことだし、むしろそこにこそ、この展示会の意義があると思う（写真3）。

展示会とは直接関係ないが、私が大学院生時代に同じ研究科にいた元韓国人留学生Kさんに会うことになっていた。実に四半世紀ぶりくらいである。彼女は現在ソウル市内の大学で学部長をしている。夕飯をご馳走してくれるということで、会場まで車で迎えに来てくれた。延世大学近くの店で韓国料理を食べた後、夜景が美しいという南山のホテルのロビーへ案内してくれた。私が泊まっている南大門のホテル方面に送ってもらう途中に



写真3 ギャラリーで「障害者差別撤廃」に関する団体の人と意見交換



も、観光スポットをあれこれ説明してくれた。

話は麻浦区の会場にもどる。3日間をとおして通訳をお願いしていたのが辛承模さんである。彼は通訳が専門ではなく、日本近代文学の研究者である。日本で学位を取得し、いまはソウル市内の大学で研究員をしている。文学研究をしているためか、日本語能力にすぐれている。だが、それだけではなく、細部まで気がつく人なので、ソウル滞在中はずいぶん助けられた。

まったく予想外のことだったが、日本でも滅多に会うこともない、日本からの研究者が何人かギャラリーを訪れてくれて、感激。たまたま展示会の会期中に、ソウル大学で東アジア近代史研究のシンポジウムがあったそうで、ついでにここまで足を運んでくれたのである。ここソウルで、旧植民地を含む近代日本の医学史に関するもろもろの議論を行うことができたことは、また格別であった。

その日本からの研究者と話すなかで、「近代朝鮮・韓国の精神医療史をともに研究している人は果たしているのか、いないんじゃないのか」という勝手な結論に達した。ところが、その次の日、「日帝時代の韓国の精神医療史で博士論文を書きました」という人がギャラリーにやってきた。上記のソウル大学でのシンポジウムとは、無関係の人らしい。ともかく、その人にあとから論文のファイルを送ってもらうことにした。

最終日の11月14日の午後。ギャラリーのある建物の上階の会議室で、「日本の精神医療の歴史と現状」という講演を行った。といっても、とてもこじんまりとしたもので、延べ10人足らずの集まりだった。上記の学部長Kさんもわざわざきてくれた。私の講演時間は30分あまりだが、通訳が入るので全体でその倍以上の時間がかかった。あらかじめ発表原稿を通訳の辛さんに渡していたが、集中力を要する大変な仕事だったと思う。

講演の中味はおもに近現代（明治から平成まで）の日本の精神医療の歴史を扱うものだったが、精神保健福祉法やその関連法規・制度にも言及し、演題に掲げた「現状」に配慮したつもりで



写真4 2014年11月14日の講演会の様子

ある。なんとというか、こちらへんにくると、大学で担当している「精神保健福祉論」の授業をやっている感じ（写真4）。

その後、質疑の時間が1時間くらいあった。日本のこと、韓国のこと、歴史や現状、さまざまな話題が出た。たとえば、1995年に制定されたという韓国の精神保健法と日本の精神保健法（1987年に制定されたが、1995年に現行の精神保健福祉法に改訂）との異同とか、近代以前の日本の精神病治療はどのようなものだったのかとか、盛りだくさんであった。が、残念ながら、会議室の都合で15時30分に打ち止めとなった。

講演会が終わり、ギャラリーに降りて、そこで人権団体の人たちと少しだべる。しばし通訳の辛さんがいない時間帯があって、ふと気がつけば自分だけが言語的孤立に陥っていることもあったが、やがて、皆が去り、辛さんと壁の布ポスターをはずして、会場は4日前の状態にもどった。彼とは地下鉄6号線の三角地駅で別れた。

こうして展示・講演会は終了した。なにしろ実験的な試みであり、ソウルでの成果を今後さまざまな角度から検討・応用するつもりで、次回の展示会のことをすでに考え始めている。他方、韓国の精神医療の歴史・現状という新たな研究課題を突きつけられたことにもなった。

以上は「近代日本精神医療史研究会」ブログ (<http://kenkyukaiblog.jugem.jp/>) に数回に分けて掲載した記事を中心にまとめたものである。